

ラサツ探見報告

明治二十五年八月六日本官共島内探見ノ命ヲ奉シ今日午後四時
 本艦ヨリ第二カターラ少シ全島南東岸ニ沿フテ着岸ノ地ヲ求ムル
 ニ断崖壁立ニ加フルニ距岸四分五乃至半ケイブル一帯ノ礁脈ヲ繞ラ
 シ波濤之ニ激シ直ニ端船ヲ着ケカタシ依テ礁外五六十呎ニ投錨シ
 タル艇ヲ使用シ一糸ノ導索ヲ岩角ニ繫キ從卒二名艇員四名トシ
 卒ヒ一先礁上ニ登リ更ラニ礁上ヲ越シテ全艇ヲ内濠ニ入レ全四時五十六分
 一同上陸シ東南角中腹ニ地ヲ撰ニテ本艦ヨリノ標木ヲ樹立シ更ラニ從
 卒兩名ヲ路ヲ開カシメ内部ニ進入セシモ草木叢生ニ容易ニ攀ル能ハズ僅
 カニ山背ノ一部ニ達シ東南及ヒ東北ニ面スル沿岸及ヒ内部ノ大要ヲ通視
 スルヲ得タリ全六時二十分一同上陸点ニ集リ全七時歸艇ス右ノ次第故
 分ノ探見ヲ遂ル能ハズ僅カニ目撃スル所ヲ尤ニ報告ス

地勢地質 本島ハ周田四五哩ニ過キス高サ百四五十呎ニ過サル一小低島

ニテ地勢西方及西南ニ隆起シ東方及東北ニ低下シ中央稍平坦ナリ地質
 ハ粗鬆ナル緒土ニシテ石花性ノ地盤ヲ掩フモノ如シ波岸ハ壁立ニテ乃至三
 十呎高サ五呎達ハ草木ヲ生セス蓋シ颶風ノ通路ニ当ルヲ以テ屢々強烈ナ
 ル波濤ヲ蒙ルカ故ナラシカ岩礁ハ全体暗灰色ノ石花質ニシテ稜々峭立
 芒刺鋭尖ニシテ其質甚堅硬ナリ之ヲ臨ムハ靴下錫々ノ響アリ之ヲ碎ケハ
 内部ノ白色ヲ呈ス岩土波濤ノ達セサル地ニ矮低ニシテ枝多ク葉小ナ
 ル灌木延茂シ伸天鵝ノ群ニ巢ヲ見ル又目白其他ノ小鳥入ヲ農ヒス
 周圍ヲ飛翔ス内部ハ「アタシ」演柰檳榔ノ類級葉茂シ間々藤ノ雜生スル
 ヲ見ル

海底ハ陸岸ヲ距ル三百碼以内ニ達ス漸近シテ愈鮮明ノ石花質
 ノ地盤ニシテ白色ナリ起伏少ナク罅隙多シ試ニ端板鉛線ヲ投セバ岩頂ニ三
 尋ヲ指スモ間々指サハル處少ナシトセズ

港灣着岸ノ場所 東南岸ニ北東岸素ヨリ港灣砂濱ナク晴天

稷波ノ際ト魚氏上陸容易ナラス西北岸ハ視察ヲ遂ケスト魚氏右地勢ヨリ
察スル又同ミカシシ

飲水食用 水源ノ有無判知ミカタト魚氏多孔石花性ノ地盤ナレハ農

ラクハ之ナカレ可シ草亦ハ前記載ノ如クナレハ食用ニ供スヘキ莫実ナレ然

氏島内海島多ク沿岸又鱧其他魚カニ富ムヲ見ル

樺木ハ前記西面ニ大日本帝國軍艦海門ト書ク西側ニ明治三十五年八月

六日建シト書ク位置ハ南東角ヲ距ル西方一ケール半ノ中腹岩礁ノ間

ニ樹立シ西面ヨリ紫ネヲ壓ミテ之ヲ維持セリ短時間ノ業ナレハ及来ノ強風

兩ニ堪エガラシトテ農ル

島内漂流民其他ノ類棲息セシ痕跡ノ徴スベキモノヲ見ス

右謹テ報告仕テ矣也

明治三十五年八月十日

海軍少尉 武部 守一

海軍大臣 山下 源次郎

海軍監 長 海軍大臣 柴田 大八郎

圖

面

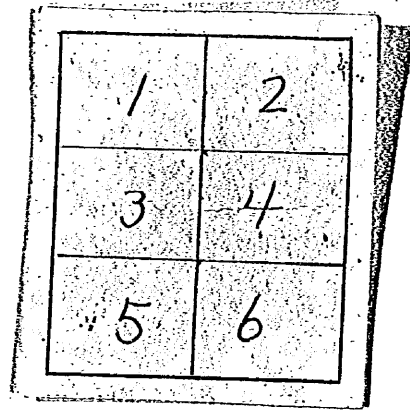
式義

1184

内務省用

分割撮影ターゲット

分割した
部分の
撮影順序



分割撮影
した理由

A 3 判 以 上 の た め

上記のとおり分割撮影した事を証明する。

1185

1186

1187

1188

1189

1190

131-0E

131-10

131-20

131-30

26°12'N

26°10'

尖東島

131-10

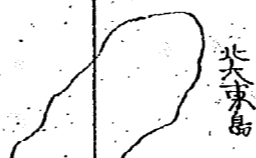
131-20

131-30

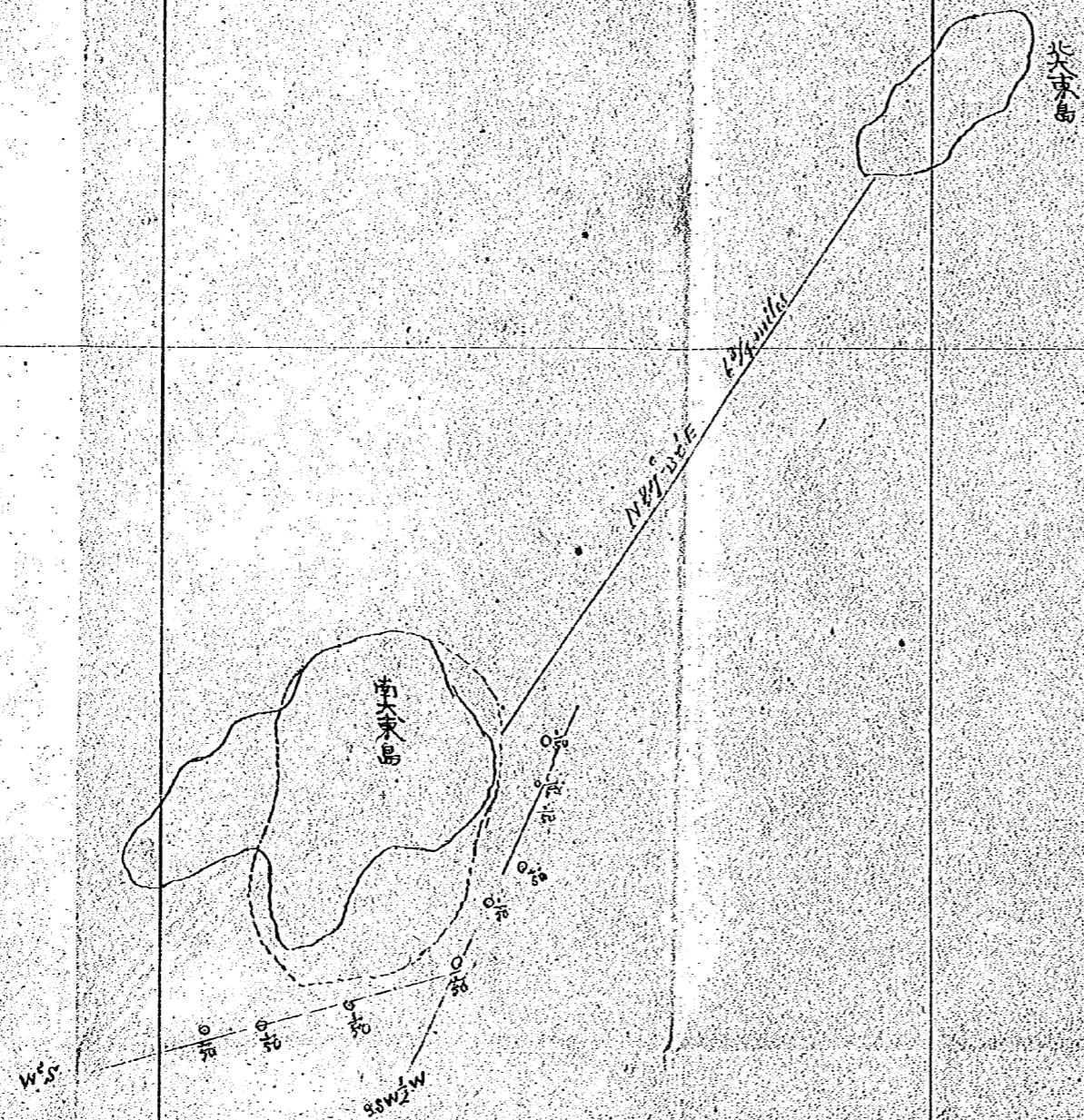
131-35

26-12

26-10



北東島



26-0

26-50

26-0

25-50

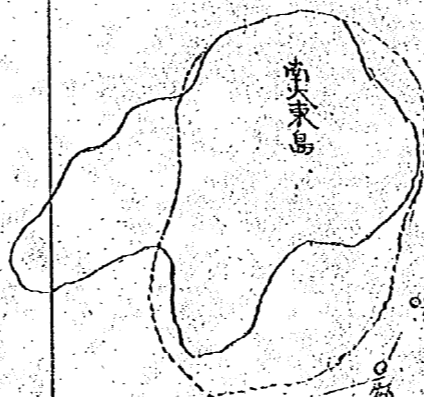
25-45.11

131-0 E

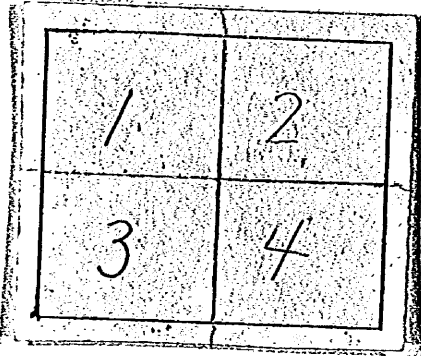
131-10

131-20

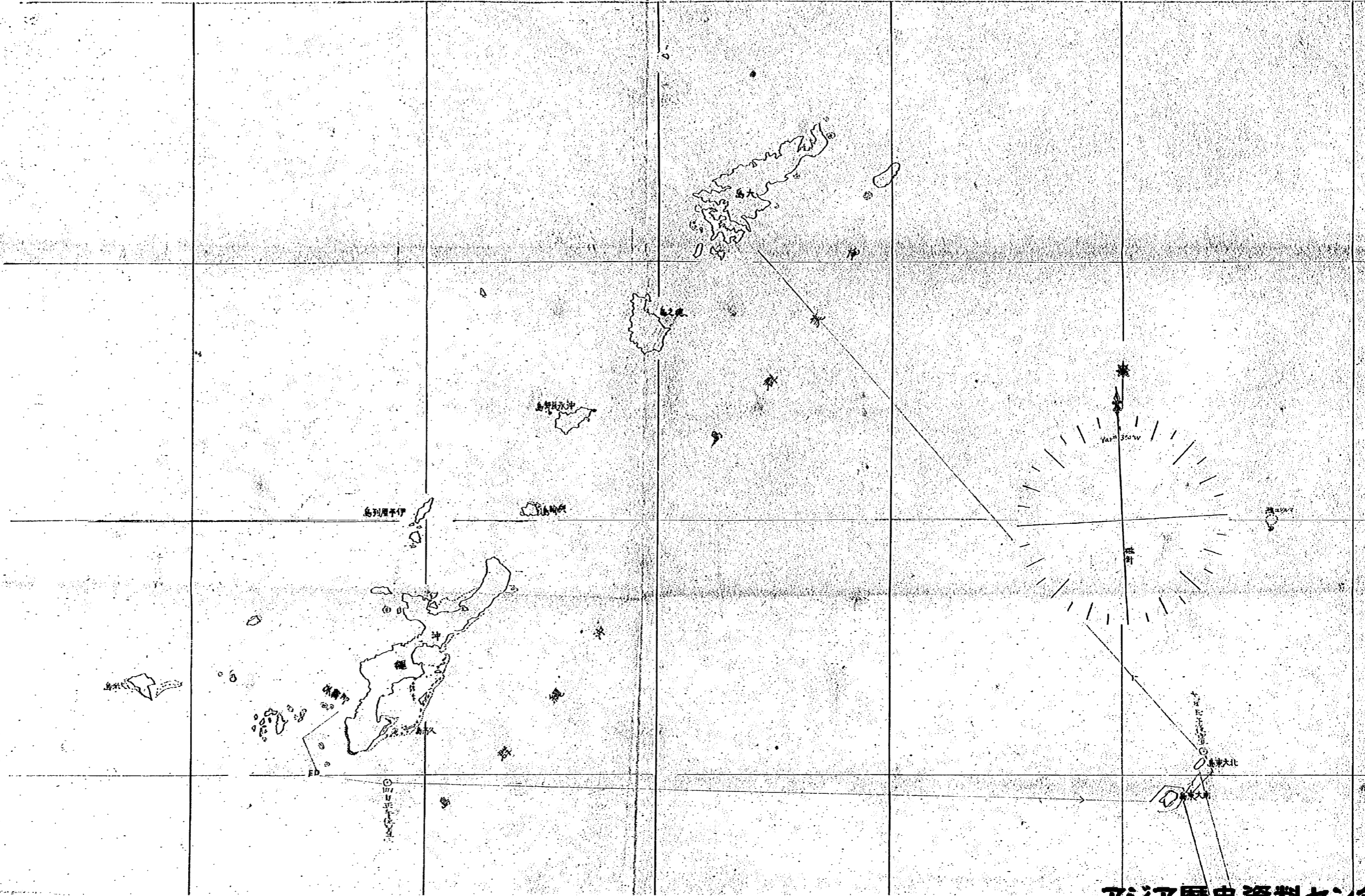
131-30

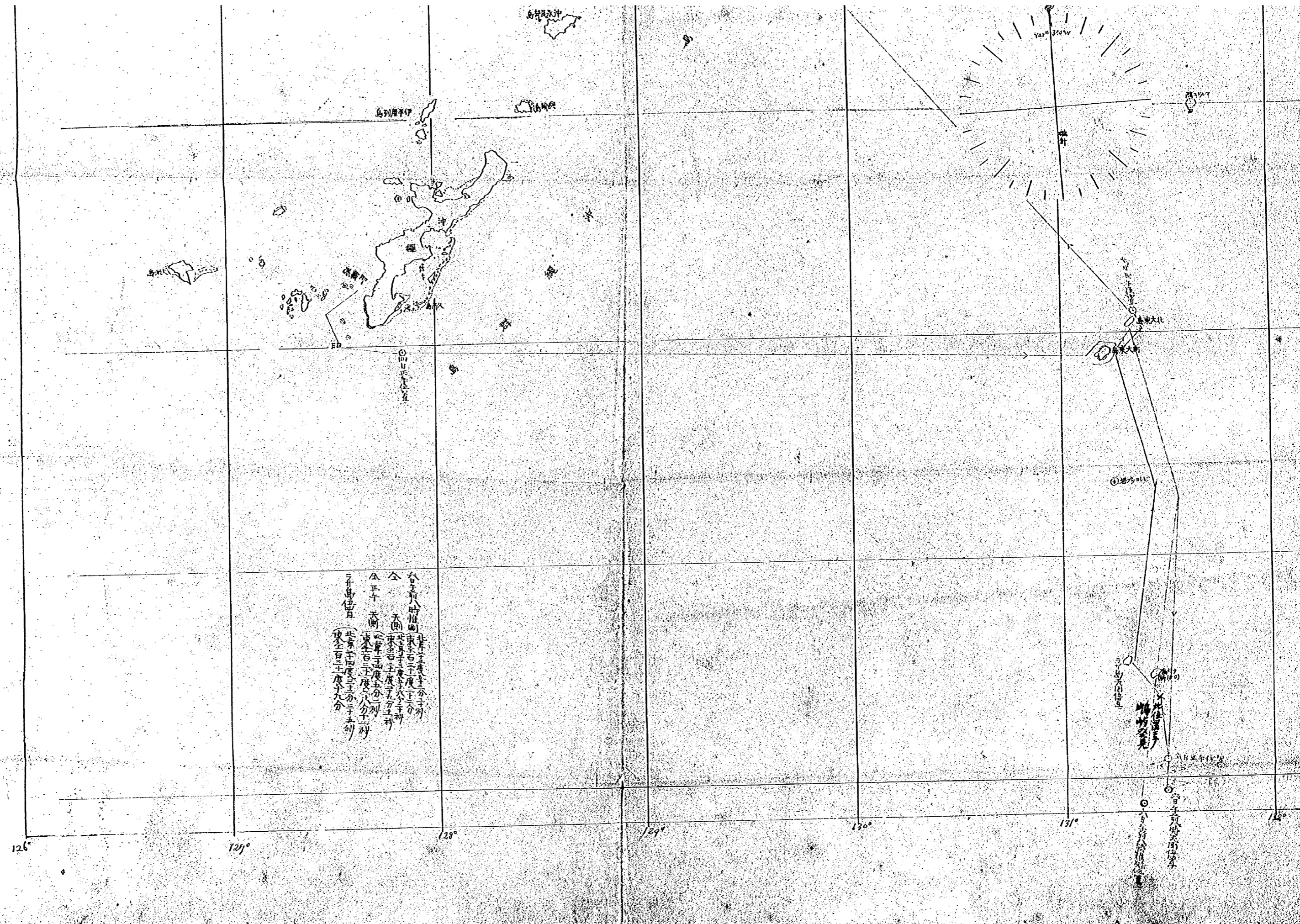


分割撮影ターゲット

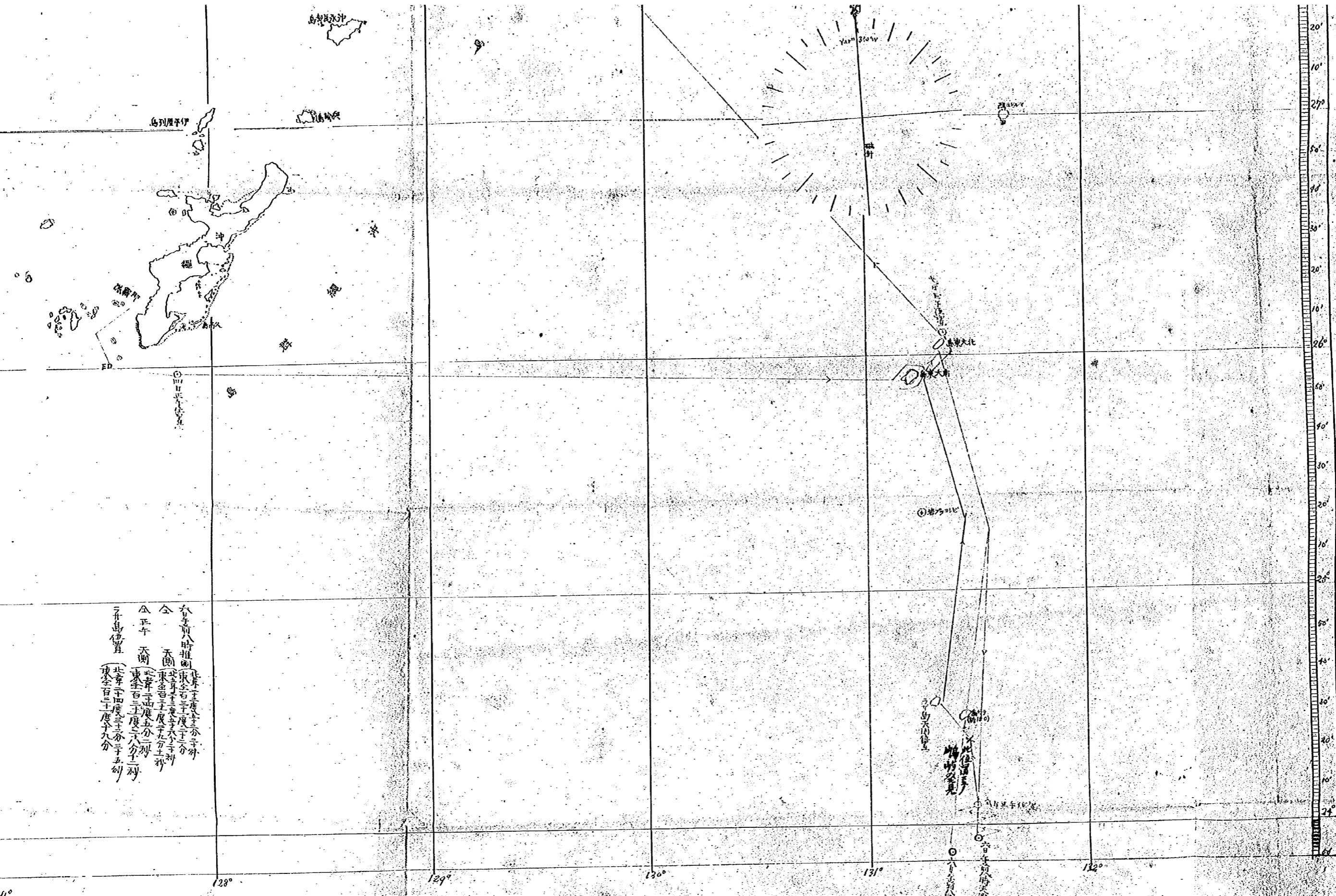
<p>分割した 部分の 撮影順序</p>	
<p>分割撮影 した理由</p>	<p>A 3 判 以 上 の た め</p>
<p>上記のとおり分割撮影した事を証明する。</p>	

1191
1192
1193
1194





右支那人所推測 北緯三十三度五分至三十分
 全 大圓 北緯三十三度五分至三十分
 △ 正午 天衡 北緯三十三度五分至三十分
 三井島位算 (北緯三十四度五分至三十分)



六月五日 時推測 緯度 正度 三分 十分
 全 天 正度 三分 十分
 全 天 正度 五分 十分
 全 天 正度 六分 十分
 全 天 正度 七分 十分
 全 天 正度 八分 十分
 全 天 正度 九分 十分

閉覽濟

次官

明治
 局
 着手
 日
 局
 年



局
 第
 十
 九
 號

次官
 主事



日本國用電信送達紙 第 二 七 號

カ
 イ
 シ
 ヲ
 セ
 ヲ
 カ
 イ
 シ
 ヲ
 セ
 ヲ
 カ
 イ
 シ
 ヲ
 セ
 ヲ
 カ
 イ
 シ
 ヲ
 セ
 ヲ

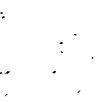
カ
 イ
 シ
 ヲ
 セ
 ヲ
 カ
 イ
 シ
 ヲ
 セ
 ヲ
 カ
 イ
 シ
 ヲ
 セ
 ヲ
 カ
 イ
 シ
 ヲ
 セ
 ヲ

海門大東島等ノ件敬録ス

部長



第一課



1197 1196

決裁済

部長

第一課

後付

本件ハ口合長官権限ニ以テ諒習スル流達様
扱セヨトシ差支セシク又季節節ニ事夕不良
期ニ至ラスト思考トモ糸左ト通口電報也

成

参謀部長

表電按

大東島等輝核ニ別ニ訓令ヲ発セズ期前
ノ許ス限リ便宜輝見セヨトシラレタシ

廿五年七月十三日

次官

印

五世孫守村長官宛

一四二九号ニ

部長



第一課

佐第一三一九三

暑ニ井上老謀部長当地出張中大臣ノ意ヲ受テ沖繩縣
 知事ヨリ上申シテ南北大東島外五島探險ノ為ノ單艦海門
 派遣之儀申談有之其處朱々該艦派遣不相成趣ニ付
 修理落成次第至急派遣ス可キ旨御申越承知仕又右件
 二付最初井上老謀部長ト本官ノ間ニ於テ其ノ意思行違有
 之且ツ探島ノ如キ特別任務ニ派遣セラルハ之ニ對スル御訓
 令無クテハ只探險ト申計リテハ艦長ノ訓令モ其ノ難し知
 事ノ上申之通り只其位置ト周圍ニ止マンモノトスレバ大東嶋ハ
 既ニ海圖ニモ位置ヲ示シテ周圍モ分明ナリ外五島ノ内奈
 赤島久場島急釣島ハ其位置判然ヤルモ知事ノ上申書ニ
 依レバ現在セシ相違ナシ南風波照間島ニサ島ノ二嶋ハ未
 夕有無モ判然ヤズ故ニ是等ノ其有無ヲ探索スルモノ如キ

ナレバ御訓令無之テハ探險ノ事柄不相分又練習船ナル
 海門ヲ探島ノ為ニ派遣スル所ハ四十六名ノ練習士夫ノ乗セ置
 キ難ク一時練習船ノ名義ヲ除キ同船昨年北海道ノ派
 遣セラルル例ニ依リ特別任務ヲ命ゼラレ可キ順序ト思考
 シ別紙申シ西度井上矢ノ謀部長ニ照會致シ置テ右
 ノ實際ニ付添ヒ以テ海門ノ是ハ御派遣ノ儀ニ莫得者
 大臣殿ヨリ相告ノ御訓令相成様所取有之度也

明治三十五年七月四日

林佐世保鎮守府司令長官

伊藤海軍次官殿

追テ御訓令之旨註議シ相成様ニ電報ヲ御
 訓令相成様所取計相成度也

甲子

沖繩縣下大東島等控業之儀ニ付六月廿日附申貴官ヨリ
 控官上ノ第一書文ニ先般協議也ト大東島等海門控業セシ中
 至急書文ヤシ控官轉地積養不在中ニ付司官長官代理
 坪井少将ヨリ之ニ答フニ協議アリト事ハ長官湯谷行三
 少将ニモ海門ハ大東島ヲ控ケラザリト第三貴官ヨリ坪井
 長官代理ニ書夫大東島控業セシ旨ハ大臣沖繩縣知事ニ
 通達セリ難官付司官長官ハ海門ニ訓令セリトヤ答フセノ
 上至急書文ヤシ控官長官ハ大東島ノ中ニ積養セバ大臣ノ
 訓令ハハト思考スモラ待テ居リト故ニ海門ニ訓令セザリト事
 ヲリ第三貴官ノ書夫島控業見ハ大臣ノ内意ヲ以テ司官長官ニ
 協議セシテ返答ナクモ司官長官ハ控官内ヲ控見スルハ大臣ノ
 訓令ヲ待タズ控官内ニテ答フヲ得トト思考ス至急海門ヲ
 派遣トテ控見セラシムト右ニ付之ニ答フニ大東島大東島調

七ノ海ノヲ流達ス東約島等ヲモ探見スルノ事ニ其ノ
 アリタリ如何ニシハ沖繩縣知事ノ上申書ニ依シテ未タ領屬モ
 判然セザルモ如キ島ナシハ但シ海ノ修理中ニ付至急ニ
 ハ莫シ難シ第回貴官ノ電文海ノ東島東約島等探見
 スルノハ既ニ海軍大臣ノ意ヲ以テ本官ヨリ林鎮守府司令長官ニ
 仰請シ海ノ東島知ノ上申書知事ノモ探見ノ旨通知
 アリテ故ニ特ニ此等ノ要エスル思考スル可ク速カニ海ノ流達
 セシメラシタス
 有ニ付海ノ東島柴山大佐ニ面會沖繩縣下島山探見等
 ノ件ニ付其ノ謀部長若シテ其他ヨリ何カ承知セシヤ相尋問スル
 何ルモ實ニ承知セズルノ事蓋スニ電文中海ノ東島知事ノ儀
 ハ何カノ旨達スル思考セリ
 沖繩縣下無人島探見ノ御出シ義知致事海軍大臣ノ意ニ

以下本官、御極議アリ之事、其當時ハ心留居ラス又貴官
 其事ハ御明言無之畢竟、隙ハ心得、為大控官ハ御咄と致
 居カレモ、相心留居ル故、御極議ハ不致且少
 其時即思見ハ陳述セテ又知事、書類モ其翌日始メテ貴
 官ヨリ以テキ一見スルニ、其時御事極ニ遠ニ殊ニ管区内ニ難
 見御練習船ニ時、御極議ハ在野ラト知シ又ハ管官也ハハ流達スルハ
 司事長官ハ御極議ニ無ク無事地執行ノ際ハ大臣ヨリ
 御極議カントトシ、思考セリ故、海軍ハ何モ此事ニ就テハ控官
 限リ言ヒセサリト、尤大東島ハ既ニ海軍ニモアリ、任置ニ知事
 之又御極議ニ建設スルニ付、御極議カラスコト、海軍ニモ其調
 ハ其島、高低港灣、安否、船務水産、島民撫育等、有
 無、編成方セシトスル中、海軍ハ精熟ナリ、其見ハ御極議事勢
 ノ概ラ、御極議カントト思考スル

舟
 車

桑赤嶋久嶋島釣島其節、由命ニ依リ沖經點尾島
 發部等ヲ明流ハハ流遣ニ寄地踏直モムル様様付
 此三島ハ位置明ラセカレモ現ニ存在セシハ相違無クモ
 南風波照所島ラサ島ノ如キ、其事ハ上申旨モ漢熟タルモ
 ニラ其者無ク新カセカレモ、如ク故ニ其等ニ至リ見ルモ
 テ危險ニ陥ラサシ様様即ラ權ニ御流遣無クテ、照所大和
 水道精熟、後勢ヲ命セシ、免類、アラズ本官、其考ニハ
 前文書前、高ニ電文ノ如ク既ニ沖經點知事ニハ大業島
 埋テモセシ旨大臣ヨリ御通達ヤリシ故此陸者南並大業島
 ノ取調ラ致シ置明ニ春期、至リ即ラ待テ桑赤島以下五
 島ノ埋見ニ御着午可カト存ニテ、御業知通り日進御用
 船々以上ハ公ま、練習用ニ供スル海船一艘アリ、若ク埋見
 ニ出ストスシ、練習人、業々付テ不相可、宜旨モ至リ現業員

其後ニ致シ汎遊スルノ外無クモルル中ニ火夫教育止ニ業廢シテ
 交ニ生ス思フコト申スレバ月ニ月ニテ探見ヲ終ル詔ニ至ラズル
 三月ノ月見迄無クテ不相成故ニ此度ハ大東島而モ致シ彼四道
 廣量非海所航ニテ此等即其他ノ探見ヲ留セズル儀ニ其浮者
 特別ノ務タカ故ニ大臣ヨリ具道通、其詔言者有之據御
 取計相成度幸ニシテ提官ノ意見ニ御同意ニ其浮者修
 理ニ概置テ止メ四道中、大東島取調ニ汎遊可致ニ也
 明治三十五年六月二十四日

林司長官

井上海軍少将親部長

乙号

沖繩縣下大東嶋等標索ノ件ニ付本月二十四日附テ以テ巨細申
 上置美ニ付定テ御承知之事ト存美海門修理ノ実況ニ未タ
 詳細御通告不致美得共昨年北海道ノ役務ヲ終ル品海ノ帰
 港セシ時權ニ賀造船部ニテ必要部分ノ修理調査ヲ遂ケル
 モ當時ハ修理費不足ノ為メ一時止ヲ得サレ部分ハ止シ置キ其他
 ハ總テ本年度ニテ修理スルノ致シ本年三月歸港直ニ之演
 習シ從事セシメ當今長壽三喜造船部ニテ修理着手中
 美此内日數ヲ費スル可キ甚多器械等ヲ除キ航海シ得ル如シ
 然レモ本年力中向シ於テ落成スルキ豫定シ有ク然レハ沖繩海軍
 ヲ追テ不穩ニ傾キ海上至テ了障懸ナレシ之ヲ避ク可キ安全
 ナル寄泊港ハ無ク此處ニ向テ探島ノ任務ヲ興ルハ派遣スル人望
 全ノ般ニ乏シシハ中モ本府所轄海門ノ如キ不完然ニ練習也

艦ヲ以テ之ト云ハルハ不安心トシテラス甚ク以テ危隙ト思考
セリ故ニ好季節ヲ待ツル機或ハ他ノ相告ノ艦ヲ御座定
之外無ク保シ大臣閣下ノ嚴命ナレバ之ヲ服従スル外無
之有リ以テ幕ニ付練習艦ニ海門ヲ其外ニテ差遣シ難
致更間隔同艦ヲ特別役務ヲ命シ御遣シ相成更得
者之トシ對テ御訓令ヲ要更條至急何カ決定
有ク度ヌカ

二十五年七月四日

林伍世保鎮守府司令長官

男爵井上海軍采謀部長殿

追テ御決定ノ次第電報ヲ御通知相成度ヌカ

決裁

次官



陸軍



陸軍

陸軍少将

印付

参謀部長



第一課



友とあるは世保鎮守の日長八云申通有
之旨

昭和廿五年六月廿七

案

豊、井口系、津渾系、長子知出、張中大臣、
三、島、外子、島、探、為、一、事、終、海、
門、島、系、中、津、島、系、電、島、系、津、島、系、
津、島、系、津、島、系、津、島、系、津、島、系、
津、島、系、津、島、系、津、島、系、津、島、系、

四二九号

申通書

廿五年六月廿七日

中次

佳世傳陽方有日長友記

參謀部長

第一課

主事



淨寫

校合



六月二日

年月日

主務

立案者

決裁

大臣

次官



主事



甲第十六號ヲ以テ無人島探求ノ儀ニ付本大臣ハ上
申ノ趣ニ依リ今般軍艦海州ヲ沖繩縣ニ那覇
港ニ派遣シ俣口水道ヲ精測セシメラレテ三付序
ヲ以テ該島ヲ探檢セシムルコトニ托成テ條此旨及

官廳一八五号

海軍大臣

通牒也

大正五年六月二日


海軍次官

沖繩縣知事

參事部

部長 

第一課 

第二課 

甲第十六号

無人島探求等之儀ニ付上申

本縣管下ニ接近セル無人島之儀ニ付テハ
 追々且筋江経伺之上実地ヲ踏木且ニ國
 標建設取計候分モ有之候得共尚ホ未
 タ踏木且之時機ヲ得サル島嶼等併テ別
 紙之通有之候處未ル三月頃本縣近海
 巡航之軍艦来着可相成哉、風説モ有之
 果シテ右様之御詮議等有之儀ニ候得
 ハ別紙久米赤島以下島嶼之義、素ヨリ
 本邦版圖ニ編入可相成儀ト被存候向、諛
 島之位置周囲等特ニ御探求相成候
 様致度此旨上申候也

本件
 印
 本件

八木川之侍大候

1121



事件、死、軍、海、門、沖、橋、野、那、霸、匠、住、水、乃、格、測、一、序、ア、ア、換、換、七、し、ん、下、可、計、置、
参謀部長

明治廿五年一月七日

津總縣知事丸岡光永



海軍大臣子爵樺山資紀殿

調査未済島嶼之景状概略

一南大東島

一北大東島

此二島ハ何レモ無人島ニシテ其筋ノ命ニ依リ明治十八年七月沖繩縣屬警部等實地踏査トシテ汎遣セシメ國標ヲ建設シ始メ沖繩縣管轄定メラレタリ而シテ同日該島實地測量トシテ軍艦發航之義内務省ヨリ内達有之候ニ付軍艦東京灣抜錨之時日通報之義同年七月十日海軍省ヨリ上申同八月水第三四五號ヲ以指令ヲ得タルモ爾來未タ軍艦發航ノ通知ニ接セズ未タ實地測量モ之ナレ昨年北米合衆國高帆難破ニ付為救助承縣屬警部等氣配大

有九為兼烈該島ハ洲遣セシメタル節即國標
文字消滅セシム以改標ヲ建設セシメタリ

一久米赤島

一久場島

一魚釣島

此三島ハ琉球國領内ノ積ニ古來相心得居其位
置沖繩縣下ト清國福州トノ間ニ散在セル無人
島ニシテ其助ノ内余ニ依リ明治十八年十月實地
踏査トシテ沖繩縣屬警部等洲遣セシメ國標
建設等ノ義同年十月何出候處同十二月廿
日下建設ヲ要セサル義ト可心得肯外務内務兩
卿ヲ指令アリ然ルニ追々管下人民漁業ヲ為シ渡
航候者モ有之是ヲ存轄シ定メ置サレバ不都合ナ

ヲ以八重山島後所ノ所轄ト致度旨廿二年一月内
務大臣、伺出未ク指令ヲ得ス

一南風波照間島

此島ハ往昔八重山島所屬波照間島ヲカ村（今カ村）
ノ人民故アツテ脱走シテ企テ舉テ移住セシ島ナリト口碑
ニ傳エ今尚波照間島ヲカ村ノ跡アリ石垣等存シ
居四五十戸ノ人民住居セシ痕跡アリ亦夕（年月未詳）
該島ニ漂着セシ者アリレニ島民共波照間島ノ近
況ヲ尋問セシトアリト口碑ニ傳アルノミニシテ絶ニ探
セシモノ之ヲシト云ヘリ故ニ其位置等詳ナラス

一ウサ島

此島ハ明治廿二年水路部刊行地圖ニモ相見エハ
重島人民ノ話ニ石垣島大瀨間切ヨリ極晴天

望ノ薄煙ノ如ク見ユルモノアリ是ニサ島カ又前
述ノ南風波照間ノ中ナルヘシト想像セリ